

『第9回 荒尾市史講演会』

第1部講演〔資料〕

「筒ヶ嶽城について」

大田幸博

元・県立装飾古墳館長
元・荒尾市史執筆者

令和3年3月10日（水）

荒尾市の中世城館跡

荒尾市の中世城館跡は、小代氏の本城とされる筒ヶ嶽城跡に代表される。県内最大級の縄張りを有する山城で、西麓の府本地区に築かれた平山城の梅尾城跡とセット関係にある。

筒ヶ嶽（つつがたけ）城跡 〔大字府本 字小岱山〕

概要

小岱山・筒ヶ嶽の主軸尾根と、枝分かれした複数の派生尾根に、数多くの遺構が残る。府本地区の梅尾城跡（里の城）からは、358.1mの高低差がある。人里離れた山中に築かれているために、廃城後の造成を考慮する必要がない。

城地は、ハイキング・コースとして知られ、府本の中央登山口から山頂まで50分を要する。山頂の西側法面に残る野面積みの石垣（加藤清正・城代の加藤美作の築造と推定）。尾根筋の堀切からは、大規模な土木作業が伺い知れる。

縄張り

VI郭は、標高491.4mで、城域の北東端にある。主軸尾根から東に突き出た小峰で、平

場の北縁から西縁には、地山を削り残した蟹鉋み状の土塁が巡る。平場は、幅 15～17m×長さ 17～28m、土塁の高さは 3m。南関町の四ツ原地区を意識した「物見の区画」と思われる。堀切（11）は、小規模な造りで、痩せ馬地形の主軸尾根を断ち切っている。城域の最北端に位置する防禦施設。堀底は、幅 2.4m×長さ 5.6m。これから北の主軸尾根は、山道に変化して城外になる。

堀切（12）は、主軸尾根からVI郭を切り離している。幅 3m×長さ 4mで、堀壁の一部は、岩盤を掘削したものである。VI郭-Aは、幅 12～4.5m×全長 32m、VI郭との高低差は 5.7m。堀切（10）からの高低差は 19.7m。登城道は、堀切（10）からVI郭-Aを經由して、VI郭へ上っていたと思われる。VI郭の南東側は、山腹が張り出すために、VI郭-Bと小段が造成されている。小段は、上位からの攻撃が出来て、守備兵の足場確保にもなる。

V郭とVI郭を結ぶ主軸尾根には、小段（V郭-F・G）と2本の堀切（9）・（10）がある。堀切（10）は、谷部を活用した大規模造りである。狭い尾根筋を土橋に加工して、両側の谷部に手を入れている。V郭-Gとの高低差は 18m、谷部は、急峻な堀壁で、谷底も平底になっている。北西側の上位に小段もある。土橋は、平時に通路であった。

堀切（9）は、V郭-Gの北東下に刻まれ、下位に小土塁を積んでいる。痩せ馬地形の主軸尾根を断ち切っており、底幅 1m。造りは堀切（11）と同じ。筒ヶ嶽城跡には、この様に大規模造りの堀切と、小規模な堀切が混在している。

V郭は、主軸尾根の北西端部にあり、標高 486.5m。平場で、幅 17～13m×長さ 19m。北西側と南西側の両山腹へ小規模な派生尾根が下っている。北西側には小段が連なり、小竪堀もある。末端は、平山地区への登山道に繋がる。一方、南西側は、V郭との間に堀切（7）が刻まれて、下位に小段が造成されている。堀切（7）は、幅 6～3m×長さ 8m。

堀切（6）は、堀切（10）と同様に、鞍部に造成されており、高低差は、V郭から 13m、南西側の対岸から 5.8m。土橋を境に、堀切が竪堀のように下る。

IV郭は、中央部の標高が 484.8m、山頂から見て北側へ延びる区画である。やや幅広の痩せ馬地形が削平されており、幅 13～20m。全長 155m。I郭-Bの南東下の堀切（1-a）端部から、I郭の東下を通過して主軸尾根に繋がっている。

IV郭-Aは、北西端の小山で、上面の北縁に、地山を削り残した土塁がある。最高所とIV郭の高低差は 6.9m。平場は、最大幅 11m×長さ 23m。張り出た東下の山腹には、IV郭-Bが造成されており、IV郭との高低差は、6.7m。間の法面は、最大幅 21m×長さ 12.8mが、削り落とされてる。下位に小段を造成して、標高 445.7mの地点に小堀切を刻む。堀底とIV郭の高低差は、39.1mもある。

I郭-Aは、筒ヶ嶽城の中心部で、一等三角点があり、「城床（しろどこ）」と呼ばれる。平場は、幅 19m×長さ 24m、南西側法面には野面積みの石垣がある。残存の高さ 1.8m、長さ 21m、北側で、長さ 3.5m分が直角に折れ曲がっている。積み石は、地山産の大振りな花崗岩で、近世城の高石垣に似かよる。石垣下の小段は、石垣を築く時の足場と思われる。「加藤清正が、加藤美作と正次を筒ヶ嶽城の城代にした」との記述があり、16世紀末の築造と推定される。類似の石垣は、玉名郡南関町・大津山城跡にある。

昭和 51 年の測量調査時には、城権（じょうけん）神社が建っていた。環境庁が案内板を設置した際には、支柱穴から糸切り土師皿が三枚出土した。

I郭-Bは、I郭-Aとの高低差が 2m。平場は、幅 13.8m～9m×長さ 28mで、以前

は、東側半分に、矢竹の材料となる篠芽竹（しのめだけ）が群生していた。中央部・西端の巨石は「財宝を埋めた底無し井戸の蓋石」との伝承がある。ただし、井戸はなく、石面に現代の和歌などが刻まれている。

I 郭の西下山腹に帯状の削平地がある。全長 42m、I 郭-Aとの高低差は 22.3m。北端と南東端に堀切と豎堀が残っている。北端の小堀切は、北西に延びる小尾根を断ち切っている。一方、南東端の堀切は、肩部に土塁を積み、堀底がやや弯曲する。I 郭西側斜面の岩壁は、堀壁の役割を果たしている。東端には、堀切と直角に交差する豎堀が下り、派生尾根の緩傾斜地に小段が付く。

これより、真西に延びる派生尾根には、二重堀（堀切 5-a・b）と小段がある。二重堀は、派生尾根の鞍部を断ち切って、南北両側へ下っている。堀切（5-a）は、堀底の北端から登山道に変化しており、当時、登城道であったと思われる。派生尾根は、これから再び高まりをみせて西方向へ延びていく。典型的な痩せ馬地形で、尾根筋が切れる端部の岩場には、「針の耳」と呼ばれる岩穴が存在する。

堀切（1-a・1-b）は二重堀で、I 郭-BとII 郭-Aとの間に造成されている。堀切（6）や堀切（10）と同様に、主軸尾根の鞍部を利用した大規模造りである。堀切（1-a）は、I 郭-Bの西側部分が、弧状の空堀に変化する。I 郭-Bの南東側裾部を包み込む走行で、西端は、直角に折れて豎堀となる。堀底は、幅 2~2.8m、全長 37m。東側部分は通常の堀切で、端部が豎堀になる。堀切には、南縁に沿って土塁が積まれているが、4ヶ所で分断されている。西側は、単なる崩壊である。東側は、登山道が登城道の転用とすれば、城門個所となる。

堀切（1-b）は、中央部の土橋から両谷部を直線的に下り、堀切（10）に近い造りである。2m幅の堀底は整形されている。

主軸尾根筋には、II 郭-A~II 郭-B~III 郭が連なり、鞍部に二重堀（堀切 2-a・b）と堀切 3 が造営されている。II 郭-Aは、堀切（1-b）の真上にあり、幅 11~6.2m×長さ 22m、II 郭からの高低差は 6.3m。緩傾斜地で、平場といえる仕上がりでない。

II 郭-Bは、主軸尾根の小峰箇所、標高 492.8m、幅 15~9m×長さ 32mの平場である。南縁に、地山削り残しの弧状土塁がある。高さ 2.6m、基底は、幅 14m×長さ 7m。

堀切（2-a・b）は二重堀で、II 郭-Bの南下の鞍部ある。緩斜面の尾根筋に、堀切が真一文字に刻まれて、双方の肩部に土塁がある。これに、堀切（3）が続く。鞍部がIII 郭側に向かって、再び高まりを見せる尾根筋を切っている。堀底は、南西端で行き止まりになり、全長 58m。堀幅の上場は、幅 9m。堀底と南東側のIII 郭との高低差は、3.8m。筒ヶ嶽城跡で最大級規模の土木工事がなされている。主軸尾根を断ち切った大規模堀切で、筒ヶ嶽城跡の実質的な南限遺構である。

空堀（2）は、堀切（3）の南西端から北西側に向けて掘られている。間に、掘り残し部分があり、両堀が繋がっていない。空堀は蛇行して、全長 51m。西端は直角に折れて堀切（4）と繋がる。鉄砲対策の電光堀である。堀切（4）は、小尾根の西端を断ち切り、堀底と小山の高低差は、4.2m。小山は、物見の場であろう。

III 郭は、城域の南東域で、捨て曲輪の要素が強い。北側に最大幅 18m×長さ 21mの平場があり、縁に土塁も積まれている。全体的に南東側への緩傾斜地である。南側の尾根筋は、緩傾斜地を下った地点で極端に括れて、山道となる。南東側の縄張りは、ここで終わる。

遺構の分布範囲は、総延長 675mに達している。『肥後国誌』に書かれた本丸はⅠ郭、二ノ丸はⅡ郭、三ノ丸はⅣ郭の事である。Ⅲ郭は、地形から見ても捨て郭と思われ、国誌もこの郭を取り上げていない。Ⅴ郭とⅥ郭も同様である。

『肥後国誌』には、筒ヶ嶽城跡の縄張りが、数値を交えて記されている。

「山城である。本丸は、東西九間・南北三十一間で、松檜椎などの木山になっている。本丸より東へ六十間下に、水ノ手がある。二ノ丸は、東西九間・南北三十八間で、松山である。本丸よりも九間、低い。三ノ丸は、東西六間、南北七十二間で、松笹がある。本丸より十間、低い。曲輪五百二十間、東は、百五十間程の大谷。西は、本丸より十二間下って、尾根続きである。南の方には、本丸と二ノ丸の間に堀があり、幅四間・深さ二間半・長さ十一間。二ノ丸の南方の二ノ丸際に、堀が二つある。但し、一ヶ所は、幅四間・深さ一間半・長さ十六間。もう一ヶ所は、幅二間半・深さ一間半・長さ十六間。この堀切より、南は、尾根続きの木山となる。三ノ丸より、北の三ノ丸際に、口が、二十五間・深さ九間・流れ二十間、四間の谷がある。此の谷より北は、尾根続きの木山である。本丸より、西の尾辻に一の堀。ただし、尾辻は、道なり。南脇は、堀亘、五間・深さ三間、流れ三十間。此堀から本丸まで二百八間。本丸より西の尾辻の堀。但し、尾辻は道なり。両脇は、堀横四間・深さ二間半・流れ二十間。此の堀より本丸まで、七百間。但し、大手東に向かい、田原村より上がる。一の堀まで、兵糧を、馬に担わせて上がり、それより上は、馬で運べないという。此の城跡は、筒ノ岳頂なり。近世、猛獣が多い」。

【小代氏の略歴】

武蔵国入間郡小代郷を縁とする関東の武士である。肥後国とは、宝治元年（1247）、小代重俊が、野原庄の地頭職に任じられた事に始まる。

文永 8 年（1271）、関東御家人は、本領を離れて九州の所領に移住する事を命じられた。重俊も野原庄に下向して、蒙古襲来時等の防衛が求められた。南北朝の内乱期は、北朝方に終始して、託摩氏と共に少弐氏や九州探題の勢力の肥後侵入に呼応した。

康暦元年(1379)の「肥前国深堀時久軍忠状」七月廿三日「馳参肥後国筒嶽御陳致宿直」から、深堀時久が、筒嶽で、宿直をした事が分かる。

室町期の肥後北部は、阿蘇郡を除いて、大方、守護大名・菊池氏の支配下にあった。一方で、小代氏だけは、国衆として自立した。大友氏が肥後を支配すると、一貫して協力した。

天文 19 年（1550）と推察される「大友義鎮書状」には、肥後北部と筑後南部の諸勢力が小代城を攻撃した時、小代氏が撃退して賞された事が書かれている。

この戦いは、菊池義武(大友氏から出て、菊池氏を継いだ人物。大友氏と対立して亡命)が、大友義鑑が横死した「二階崩れの変」後、義鎮後継の混乱に乗じて、諸氏を味方につけて、最後の勢力回復を狙ったものである。

激しく攻撃された小代実忠に対して、大友義鎮は、「筒岳在城之由候、諸事察存候、於諸方敵中、一人拔出大忠之地盤、更異干他候之条」と賞している。小代氏と筒ヶ嶽城に関する確実な資料である。

近世初期に編纂された筑後の国人領主・田尻家の「家譜」には、次の記述がある。天正7年（1579）3月の龍造寺軍による小代氏攻めを描いた部分である。

小代宗禪（実忠）と、親伝父子の本拠は、「筒嶽ノ本城」・麓の「梅尾城」・「小路口」「町小路」で構成されていた。鍋嶋隊は、「町小路」へ放火したが、小代氏は、二千人の軍勢を率いて、鍋嶋隊と激突したとある。

『上井覚兼日記』の天正12年（1584）九月廿四日には「小代下柵まで破却候、敵少々被取候也」。二日後には「小代城之腰二白間野方陣取構被居候、其陣処破却候、宮崎衆拙者倅者一番之由也、墻越之合戦共候」

天正15年（1587）、豊臣秀吉の九州出兵後、城氏の隈本城、名和氏の宇土城と共に、小代城は、佐々成政の城として召し上げられた。城主は、上阪を命じられたので、小代氏は、肥後国衆一揆に荷担していない。

佐々成政の改易後、加藤清正は、小代城にも城番を置いて、加藤美作を城代にした。その後、小代氏は、細川の家臣として存続した。